



# 名寄市立大学の窓から

## 知への誘い

vol.105

### パプアニューギニアの人々の医療利用

保健福祉学部 栄養学科 教授 塚原 高広



世界のすべての国や地域の間には、健康状態や医療サービスの質や量に差が見られます。そのような格差が生じた原因を解明し、解消するための方法を考える学問が国際保健学という分野です。世界全体で見ると約半数の人々が、基本的な医療を受けられない状態にあります。その中で私は、パプアニューギニアという国に通い、子どもの健康調査を20年以上続けています。

パプアニューギニアは、南太平洋の赤道直下に位置し、オーストラリアの北にある島国です。私が滞在する村では電気ガス・水道はなく、自給自足に近い生活をしていきます。約9割の子どもが貧血で、約2割の子どもが慢性栄養失調にあり、マラリアや肺炎など感染症にかかる子どもも多くいます。そんな子どもたち

が病気にかかったとき、保護者はどんな治療をどのような理由で選ぶのかを調査しています。その結果、医療施設を利用しない要因として次のことが考えられます。

まず、病気の種類、症状、重症度です。軽症なら家庭内で治療することや様子を見るのが一般的です。次に、医療施設までの距離です。道路が整備されておらず、公共交通機関も未発達な地域では、受診に丸1日かかることもあります。また、受診にかかる費用も問題です。現金収入に乏しく、貯金がまったくない人もたくさんいて、医療費や交通費を負担できない方も多いためです。医療施設が提供するサービスも問題です。医療の種類や休診日、診察する時間や待ち時間、処方する薬の在庫量なども関係して

います。さらに、社会や文化もまた受診に大きく影響を及ぼしています。例えば、精霊を怒らせたり、悪魔が取りついたり、他人に呪いをかけられると病気になると考えられています。その場合は、伝統医療の専門家だけが治す能力があると信じられています。

このように、さまざまな要因で医療施設を利用しないことがわかりましたが、パプアニューギニアでの子どもの発熱に対する医療利用調査の結果、距離が一番重要な要因であることがわかりました。歩いて30分ほどの距離でも利用率がぐっと下がります。日本にくらべて時間がゆっくり流れていて、時間は障壁とならない印象があったのでこれは驚きでした。また、費用の影響も大きく100円を超える利用率が落ちてしまいま

す。発熱には西洋薬である解熱鎮痛薬、抗生剤を使えば症状が緩和することを知っています。西洋薬の名前や正しい服用量もよく知られています。もちろん、病気の重症度も受診率と関係しており、重症の場合には、遠くにある診療所を受診する傾向がありました。軽症では自宅で様子を見たり、庭の薬草を使ったりして家族が治療をします。このように、パプアニューギニアの人々も手間や治療の効果を自分なりに考えて治療を選んでいると考えられます。

研究を通じて人々が必要



### 大学図書館へようこそ！

4月、新学期の始まりです。コロナ禍になり約2年。生活スタイルの変更を迫られ、学びの状況も変化してきました。図書館はそんな学生や市民のみならずの応援団です。コロナと共存して充実した時間を過ごすためにも、是非、大学図書館をご活用ください。

#### 【4月の開館について】

1日(金)～9日(土)、30日(土)は9時～17時までの短縮開館です。  
16日(土)、23日(土)は9時～18時50分までの短縮開館です。  
日曜日・祝日は休館です。

◆問い合わせ  
名寄市立大学図書館

01654@7671 (直通)  
ncu\_library@nayoro.ac.jp

### 大学図書館にはこんな本があります

～「知」への誘い～からもう1歩～

国際保健医療に関係する図書をご紹介します。

『国際保健医療学』 国際保健医療学会/編著 杏林書院

→2001年に定義された比較的新しい学問分野最初の教科書。グローバルヘルスのほか、関連領域、国別事例も掲載されている。

『福祉の世界地図 くらべてわかる世界地図4』

あかふし ゆみこ 藤田 千枝/編、赤藤 由美子/著 大月書店

→いのちと健康を地球サイズで考えるシリーズ。衛生施設、医師の数、感染症・・・など、児童書で地図が色分けされてひと目でわかりやすい。

『やさしく学べる 国際保健・看護の基礎と実践』 山崎 明美ほか/編 桐書房

→国際保健とは何か。歴史と発展、日本の関わり、事例も多数紹介されている。進路の選び方、学習の仕方も掲載されており、将来、国際保健に関わりたいと思う方は必読。